

No. 96

1991.

12. 30

岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-32 関市小屋名
(百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111(代)
振替 名古屋 6 37909

第16回

東海三県博物館協会 交流研修会開かる

平成3年10月17日(木)・18日(金)の両日にわたりグリーンピア恵那を中心に第16回東海三県博物館協会交流研修会が開催されました。

総会には、各務斉岐阜県教育委員会文化課長が来賓として参加下さりご挨拶を賜りました。

愛知県31名、三重県16名、岐阜県31名、総数78名が参加下さり、にぎやかに交流がなされました。

1日目は、記念講演と研究協議が行われ、博石館の岩本哲臣氏が「博石館の経営について」の演題で講演されました。その後、愛知県代表尾西市歴史民俗資料館の小林弘昌氏、三重県代表斎宮歴史博物館の榎村寛之氏、岐阜県代表加藤よね子氏の三者から「生涯学習と博物館」というテーマに基づいて研究発表をしていただきました。

2日目は、すばらしい秋空の下、グリーンピア恵那の専用バス二台に分乗し東濃地区の三館

を見学しました。

博石館(恵那郡蛭川村)では豊富な鉱物を見学し、巨大なピラミッドやオブジェに囲まれた石の世界を散策し、豪華な喫茶室「MW」でコーヒーをいただきながら各県の交流ができたことは、貴重な体験でした。

青邨記念館(中津川市)では前田青邨画伯のデッサン、下絵等豊富な資料と作品を渡辺美津子さんの解説で見学することができました。

苗木遠山史料館では安池俊介館長の案内で建設の苦労話も交えながら、苗木藩の歴史や文化の特徴を理解することができ、新しい地域の資料館の今後の活動のあり方等も示していただきました。

1日目の夜の懇談会は各県、各館園の交流が活発に行われ、2次会も各部屋で遅くまでなされ、互いの実践や研究の交流に花を咲かせました。来年は三重県鳥羽市で開催される予定です。



記念講演

『博物館の経営について』 (博石館 岩本哲臣氏)を聞いて

今回の東海三県博物館協会交流研修会は、会場となった恵那市の隣村 蛭川村で、独自の事業展開を行い常に話題を呼んでいる、博石館館長岩本哲臣氏に記念講演をいただいた。岩本館長は、1949年生まれ、働き盛りの44歳、自らを石材業者とは言わず石屋と称する職人氣質の持ち主であられた。演題は「博石館の経営について」。博物館としてはユニークな石の博物館の経営理念を軸として、博石館設立の経緯、現状、未来への展望という順番に拝聴した。

博石館のある蛭川村は花崗岩の産地として有名で埋蔵量は全国2位を誇る。また120種以上の鉱物資源にも恵まれ、4000人の村に40社以上の石材業者がある石の村である。

岩本館長のお宅も自身が4代目となる石材業者である。常日頃会社経営に御苦労される中で、設計技師や建築家の下で何かと日影の身になることが多い石屋が表舞台に立てないかと腐心されていたようである。その具体的な構想として、石材工学を研究する石屋の養成、蛭川村の石・鉱物を保存し活用する場の設立、石屋が考案しデザインした建物の建設等の夢をお持ちになられた。そこには、石の暖か味を直に知っている石屋にしかできない事への情熱が感じられた。

この構想は岩本館長のお父様が御存命であられた十数年前からのもので、何かと^{しつこく}多かったお父様とも、この事に関しては意気投合されたとのことである。そのお父様も11年前に他界され、岩本館長はそれを期に自身の夢であ



り、父親の希望でもあった石をテーマにしたカルチャーセンターづくりに踏み切られた。



建設にあたっては、できる限り手作りでやろうという事で、随分苦勞されたようであるが、無サッシ工法、片面工法等のアイデアで、石の魅力を充分引き出す美しい建物が出来上がった。また、幅広い交友関係が役立ち、経費が安価で納まり、人間関係の大切さを再認識されたことも披露された。現在では、本館のほか、既にシンボルとなっているトラバージンのピラミッド、5000人の収容規模を誇るコロシウム、みかげ館、ローソクとたきぎの部屋等、施設も増え、石の文化ゾーンが完成しつつある。開館当初は赤字経営であったが現在は年間16万人の入館者を迎え、好評を得ているようである。

今後も、石科学館、石おもしろ館、ベルトラン館、ストーン・ブラックホール等の新しい企画・建設が進行中である。岩本館長は既存の施設と今後も増える施設を一体化させ、総合的な石の表現をしていきたいと語られた。

地球誕生以来、悠久の時間を過ごし、常に人間の傍にあった石。その石を通じて心の美学を追究していこうとされる岩本館長のお話を通じ、日頃はあまり意識しない石の持つ美しさ、奥行のある世界の一端を認識させられた。強い理念のもと運営される博石館は、これからもハードウェア、ソフトウェア両面にわたり、斬新な博物館として、注目され続けるであろう。

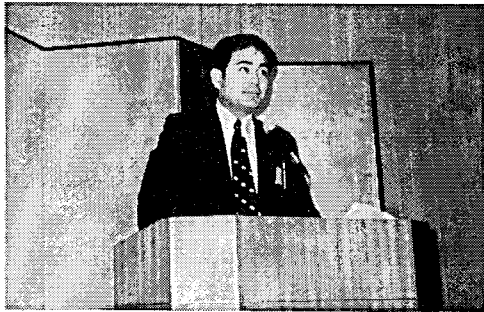
(岐阜市歴史博物館 横田 宏)

研究協議

愛知県代表

愛知県尾西市歴史民俗資料館

小林 弘昌 氏



「生涯学習と博物館」のテーマに関連し、小林氏は尾西市歴史民俗資料館の講座の開設についてその実践例と今後の課題を発表された。その主旨は次のようである。

昭和61年度開館当時4つの講座を開設されたが、当初の目的は新聞等に宣伝していただけることから、入館者増を目指す1つの場としての講座であったが、年々回数と講座数を増やし活動する中で、地域の公民館やカルチャーセンターとどう違うかという疑問が呈せられてきた。

平成2年度から講座内容に変化をもたせ、地域の歴史や街道に関する講座を設け、その内容の充実を図った。文化財探訪や、歴史の道探訪などは資料館の独自性が示され大変人気を呼んだ。

小林氏はまとめとして「試行錯誤を繰り返した結果、ただやみくもに人を集めることを目的とした講座の組み方はやめようと考えました。

今年度でいえば、『尾張の歴史と民俗』という、地元の歴史について毎回異なるテーマについて、それぞれ別の講師の方に概論していただく10回の講座を幹として、それとは別に、『木曾川を知る』『街道の歴史』といったテーマを絞って、やや深く考えてみるような短期講座を枝として、館の講座全体で完結するような形を目指しました。

これによって、少しは当館講座とまちのカルチャーセンター等の差異化がはかられたのではないかと結ばれた。

研究協議

三重県代表

三重県立斎宮歴史博物館

榎村 寛之 氏



榎村氏の発表は、斎宮歴史博物館の概要から始まった。本会のテーマ「生涯学習と博物館」についての内容は次のようであった。

三重県教育委員会は、昭和63年から3か年にわたり「三重県生涯学習検討委員会」を設置し、平成3年3月にその最終報告「三重県の生涯学習の在り方について」が出された。その中で学習の場の提供、学習の機会の提供、学習の情報の提供、指導者の育成と確保の4項目が提言された。この提言を博物館としてどう受け止め、具現化していくかが、今後の大きな課題である。

斎宮歴史博物館における生涯学習の課題と展望について次の6点で語られた。

- (1)博物館活動のための予算、人員の確保、施設整備など条件整備を行う。
- (2)研修機会の拡大を図り、職員の啓発に努める。
- (3)地域の文化活動の核になることを目指し、地域社会と連携をとる。
- (4)県内小中学校を無料にするなど教育現場との交流を密にする。
- (5)他館との連携、交流を積み重ねていく。
- (6)ボランティア性を求めるのではなく、生涯学習としての友の会のあり方を模索する。

その他に博物館は研究、情報の場だけでなく、多くの人に気軽に利用されるためにもっと遊び場的要素を加えていきたい。このような面からこれからの博物館は明るく、落ち着いていて入館した人々を和ませる場でなくては、と結ばれた。

研究協議

岐阜県代表

岐阜県陶磁資料館

加藤 よね子 氏



現代社会において色々な環境の中であらゆる年齢層にわたり、学校、家庭、職場や地域社会における教育機能を通じ、知識や技術を習得し、情操をも養い自己形成と生活の向上の為に必要な事柄を、生涯を通して学ぶことが理想的であります。ますます高令化時代を迎え、個々の生涯において健康保持を増進し、学習活動をも充実することが望ましい。それに伴う教育施設の整備、充実がなされております。

各地には、公民館、図書館、博物館、文化会館などの施設があります。今や博物館はサービス業務であり、博物館人は常にミュージアム・ティーチャーでなければいけないといわれます。

低年齢層から高齢者まで、又国内、海外からも足を運んでいただく中で、一度来てもう一度観たい博物館、資料館にしてゆかなくてはならないと思いますし、もちろん展示の充実、魅力ある特別展の開催等に比重を置くよう心がけています。

当館では学校、商社、地域社会のサークル、例えば婦人学級、老人大学等々のグループの来館があり入館者数も順調に増加しています。

生涯学習の一環として当館では、案内や美濃焼の歴史についての勉強の場を提供しています。最近では以下のような美濃古陶の文様を取り上げ植物編、動物編、幾何編等に分類し、シリーズとして実施しています。

美濃古陶に描かれた文様

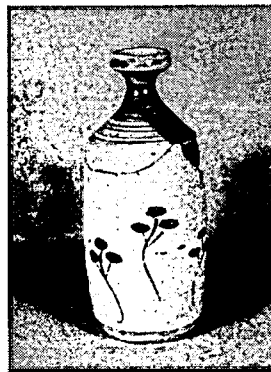
焼きものは人間の文化と共に発達してきました。美濃焼も長い歴史の中で培われ独自の発展を遂げてきました。岐阜県の南東部にあたる美濃地方では良質な陶土が産出され環境、資源にも恵まれた所であります。平安時代の延喜には陶器を納める国と定められた事が記されております。ことに室町から桃山時代には絢爛豪華な時代背景のもとに茶の湯が流行し、茶匠、千利休、古田織部らによって確立された好みは、いちはやく茶陶にも反映されました。

美濃焼を代表する黄瀬戸、瀬戸黒、志野が焼かれ、織部焼を含めて桃山陶と呼んでおります。

その美濃古陶に描かれた文様は、数限りなく描かれております。かつて陶工たちの手で目で自然物、動物、幾何文様等を、オリジナリティーに、多岐にわたって描き、モチーフは描写的であったり、図案化されたり、力強く自由奔放に筆を走らせています。

〈植物編〉

16世紀後半の志野に見られる文様は簡単な鉄絵が描かれているものが多く、17世紀の織部陶になると、手工業的に量産化されるため多種多様な絵付も一層図案化され、アレンジされたデザインとなってきます。古来茶人に珍重がられる茶陶、向付、鉢などに梅文様と思われるモチーフが多く描かれています。梅樹文であったり梅花と他のモチーフと組み合わせたりしています。古来から日本人の美意識として愛好された吉祥文である松竹梅文は、陶磁器の絵付にも数多く描かれています。古くは万葉集に詠われた松は厳寒にも落葉せずその雄大さに観るものもの



心に深い感動を与えてくれます。松葉を丸状に描き周囲に火花を散らすように表現したり一本松、三本松が図案化され表現されています。織部末期になるとかなり図案化され、簡

略化された大富窯出土織部徳利は鉄絵の芦文と松絵が織部釉との調和が美しく感じとれます。志野小皿の内面には三面笹、五面笹が描かれていたり江戸後期には竹の意匠の全盛期で御深井焼には鉄釉で摺絵を施しています。

他にも多岐にわたり、芦文、つた文、草花文等、その生活や風物を実にうまくアレンジしているようです。

〈動物編〉

鳥の表現方法はつぐみ、千鳥、つばめなど、どれを見ても同じようだが組み合わせられた文様から想像すると柳があればつばめ、網が描かれていればつぐみでしょうか。外にも耳を長くヒゲを誇張した兎、跳ねるようにかなり図案化された鹿など動的に描かれています。

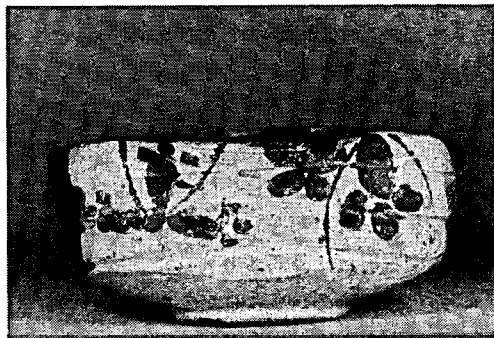
エビ、カニなど一筆描きや線描きのものもあり、ユニークに可愛らしく描かれています。

その他リズムカルに、器面いっぱい点と線で結んで点を配列したりして幾何学的に清楚感

を効果的に表現しているようです。抽象的に又南蛮文化の影響を受けたような文様が織部焼に描かれているものもあります。

数限りなく古陶に描かれた文様のモチーフは、身近な自然物を熟練した筆のタッチで異種のモチーフを組み合わせながら自由奔放に筆を走らせ、素朴な中にもロマンを感じます。

こうした美濃古陶の文様の数々は陶工たちの手で描かれた貴重な文化遺産でありましょう。



交流研修会に参加して

志摩民俗資料館 西城利夫



今回の研修会も、岐阜県博物館協会の皆様のご尽力によりまして、有意義に過ごさせてもらいましたことをまず御礼申し上げます。

私自身の参加も、かれこれ5・6回を数えますが、開催県による趣向を凝らした研究討議や見学会にはいつも頭が下がります。

研究討議の『生涯学習と博物館』は、これからの博物館にとっての大きな課題の一つですが、今一つ具体的な事例が無く、どのようにすればと思っていた矢先ですで大変参考にすることが出来ました。ただ時間の関係で深く議論が出来なかったことは残念でした。しかしそれを補ってくれたのが懇親会後の、各部屋での2次会です。各県入り混じって、酒を飲みながら言いたい事を言い、本音で博物館を語る良い機会が

ありました。

現在の研究討議の方法では1時間30分で、3人の発表者が20分以上を使って発表をするため、どうしても質疑や討論の時間が制限され、話を聞くだけになってしまっているような気がします。ここで一つの提案として、最初の基調講演の時間を半分にして、討議の方へ振り替える事が可能ではないかと思えます。その上で討議も発表者は要旨だけを短く10分余りで述べ、残りの時間を質疑及び討論の時間として利用する事は出来ないのでしょうか。規模の大きな博物館等においては、他の研究会等参加して、博物館についてのいろいろな討議をする機会もあろうかと思えますが、私どものような小さな館にとっては唯一の場所だからです。博物館の役割が大きく叫ばれている現在、博物館自身が自己研鑽出来る場所を大切にしていきたいと思えます。

次回開催は三重県です。多くの皆さんが参加され、共においしい魚を食べながら、話をしようではありませんか。

交流研修会に参加して

鳥羽水族館 松尾千代子



10月17日～18日に岐阜県で開催された東海三県博物館協会交流研修会に初めて参加しました。

今回の研修会で、博石館、青邨記念館、苗木遠山史料館などの施設を見学しました。今までに数回、岐阜県を訪れていましたが、これらの施設は初めてでしたので感想を少し書いてみました。

◇博石館……博石館というのがあると知っていましたが、内容については全く知らず石の展示をしているということで、一度見てみたいと思っていました。17日には博石館の岩本氏による講演を聞かせて頂きましたので、創るにいたった過程などはよくわかりました。展示物はいろいろな物があり、またとても美しく磨いたオブジェなどが多く、目を楽しませてもらえました。蛭川村の石の展示が数多くあり、また結晶

の出来るまでなども紹介されておりいろいろと勉強になりました。館外のピラミッドやコロシウムはもう少し時間をかけてゆっくりと散策したいものだと思います。

◇青邨記念館……日本画家である青邨氏の下図が多いと職員の方に聞いて見にいきました。私は下図はよくわかりませんが、実際に出来上がっている日本画はとても精密で美しいと感じました。この青邨氏が寺社の絵を修復している写真が展示されており、昔の技法を知る人だったんだと感じました。

◇苗木遠山史料館……館内が新しく、展示も趣向があり、楽しく見学させていただきました。また茶室があり、お茶会なども行うのかと感心しました。

以上のとおり簡単な感想を書かせていただきましたが、自分で知らないことの多さを実感しました。また多くの施設の方々と交流の場ももてた事が、今回の私にとっての一番の収穫だと思い、このような機会を頂いた関係者の皆様にお礼申し上げます。

交流研修会に参加して

蟹江町歴史民俗資料館 伊藤和孝



東海三県の職員研修会への参加は、今回三年ぶり2回目であるが、「生涯学習と博物館のありかた」という点で関心のあるテーマであった。これまでの博物館

・資料館活動は、資料の収集、展示、調査、研究に力がおかれ、最近各教育施設で「生涯学習」が強調されている中、最もこの問題に疎遠な施設の一つが博物館・資料館であったのではなからうか。事実、博物館活動の中核となる学芸員各位においては、関心のもてる分野ではなかったと思われる。(少なからず関心もち、実践されている館員の方もみえると思いますが……)

各県代表館においては、教育普及活動の状況、展示の内容説明、利用者に対する館の働き等、現状の成果と問題の事例発表がなされ、愛知の尾西市歴史民俗資料館は、講座の充実を、三重県

齋宮歴史博物館は、イベント活動を主眼とした活動等、それぞれ館の設立テーマに沿ったものを生涯学習に役立て、将来にわたり博物館のありかたを考えていこうという積極的なものであった。事例発表の感想として、大変参考になる活動内容であったと思われるが、講座については、日時の設定等の制約や内容の特殊性、専門性の問題があり、生涯学習を連続して行っていく点で今後も十分に検討を要する事項ではないだろうか。

この期間中、多くの同様の人々と接して懇談し、博石館、苗木城資料館、青邨記念館を見学、各館の展示の内容及び活動状況の説明等特色のある博物館活動を理解できたといえよう。また博石館長による館設立や運営の苦労や理念、情熱を聞き、2日間の研修会参加は今後の当館の活動に役立ったと思われる。ただ、一つ要望があるとしたら、事例発表の際、質疑応答の時間があまりなく十分な討議が行えなかった。今後は十分な時間の配分を考慮していただきたい。

交流研修会に参加して

岡崎市郷土館 鈴木 智子



三県交流研修会に参加するのは今回が初めてであったので、初対面の方が多く、1日目はやや緊張気味のスタートであった。研究討議は「生涯学習と博物館」をテーマとして3人の方の発表があり、各館での生涯教育への取り組みについてお話を聞くことができた。生涯教育という1つのテーマについてみても、館の性格やその利用者層によってさまざまな方向性が見出せそうだ。「博物館はかくあるべき」といった議論も必要ではあると思うが、現実的には、中央志向型の館があれば、地域志向型、あるいは観光・レジャー志向型の館もあるといった具合に、博物館も多様化の時代を迎えている。実際、今回の研修会に参加し

てみてそう実感した。今後は、自らの方向性を見定めた上で、個性を生かした活動を展開していくことが必要になってきそうだ。そのような中であって地域志向型の博物館が地域のキーステーションとなり、周辺の館との役割分担をしながら市町村の枠にこだわらない広域文化圏のネットワークづくりをすすめていくことができれば、と現状を省みて思う。

「遅れている」といわれながらも具体的な事例をうかがえば、どの館も限られたスタッフと予算の中で、博物館における生涯教育の可能性を模索しているということがよくわかった。また、事例発表をされた三県それぞれの代表者の方から、その加盟している博物館協会の雰囲気も感じ取られるような気がした。館レベルでの情報交換はもちろん、各博物館協会の活動報告などもあれば、またおもしろいのではないかと思う。県内研修会とはまたひと味違った有意義な2日間であった。

第50回 公開講座報告

『海を渡る蝶—渡瀬線と生き物たち—』

とき 平成3年10月13日

ところ 岐阜県博物館

講師 鹿児島県立博物館長 福田 晴夫氏

本年度第3回公開講座を、岐阜県博物館で開催されている記念展「鹿児島」の講演会をそれに当てさせていただくという形で実施した。

講師の福田先生は、高校時代から蝶の研究をはじめ、その後一貫して今日まで鹿児島県の蝶類研究の中心人物として、また、日本鱗翅学会の会員として活躍されている方で、時折鹿児島県と鹿児島県立博物館のPRを織り混ぜながら豊富なスライドフィルムを使用して美しい蝶の不思議な世界を講演された。

講演の終了後、県博物館学芸主事大平高司先生の懇切丁寧な解説で記念展を見学し、16時30分に講座を終了した。

〈福田先生の講演要旨〉

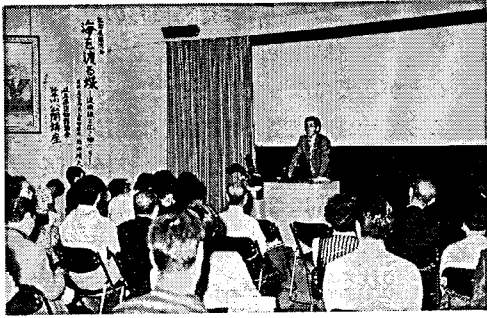
1. 迷蝶 — 海を渡る蝶 —

鹿児島県の蝶の種類は149種類あり全国一であるが、県内に住んでいない蝶が約20種類ほど含まれている。これらの蝶を迷蝶と呼んでいて当初は県内に生息しているものと考えていた。

しかし、どこにもその痕跡がないことから調査を始めた。『①いつ、②どこから、③どのようにして、④どこに来て、⑤どうなったか』の観点から実施したが、特に②と③が難しかった。

調査を進めていくと、4月頃から梅雨明け頃にやって来て冬を越せないで死滅してしまうこと、中国大陸から気流に乗ってやって来る昆虫がいること、迷蝶の発見された前日の天気図に共通点があることから、南方から海を渡ってやって来るのではないかと仮説をたてた。迷蝶には次のような種類がある。

オビコノマチョウ、ウスキシロチョウ、ルリウラナミシジミ、アオタテハモドキ、メスアカムラサキ、ツمامラサキマダラ、マルバネルリマダラ、リュウキュウムラサキ等。



本日はこのリュウキュウムラサキについてお話ししたい。この蝶は住む地域によって4タイプに分けられる。

- ☆大陸型—インド、インドシナ半島、中国南部に生息する。
- ☆フィリピン型—毒蝶のルリマダラとよく似た模様を持ち、フィリピンに生息する。
- ☆台湾型—台湾と中国大陸の一部に生息する。
- ☆赤斑型—日本にやって来る蝶でどこからやって来るのか不明。

1983年に赤いリュウキュウムラサキが50数匹採れた。遠くでは茨城県、神奈川県等で捕獲されており、小笠原諸島、硫黄島から飛来したのではないかとの説が出された。しかし、調査の結果は紋様等が異なっていた。

鹿児島にやって来る赤いリュウキュウムラサキの生息地域をパラオ諸島、ボルネオのどちらかと仮定し、パラオ諸島から調査を始めた。この島にはリュウキュウムラサキが生息していたが、他にウスグロマダラチョウが沢山いて、この蝶は日本にはやって来ていないことから、パラオ諸島からの飛来ではないと結論した。

次にボルネオを調査した。クチンという町には立派な木造の博物館があり、ここに100年前の赤いリュウキュウムラサキが展示してあり、日本にくる蝶と同型であった。人家の近くにはこの蝶が沢山飛んでおり、幼虫がエンサイという野菜について繁殖をしていた。

赤いリュウキュウムラサキが大量に捕獲できた1983年の7月15日の天気図を見ると、2つの台風がボルネオ付近を通過している。日本海には低気圧があり、太平洋側には日本列島に沿って梅雨前線がのび、南西から強い季節風が吹き込んでいることがわかった。このことから、

台風によってボルネオからフィリピン近くまでやって来た蝶は、ここで季節風に乗り換え日本に来たものと考えられる。距離にして4000kmもあるので、途中下車してその子孫が日本までやって来るということも考えられる。フィリピン、台湾に生息している同種の蝶と交配させてその子供を調べたところ、日本に来るものとは違っていた。また、日本に来た蝶のほとんどは交尾をしていなかったことから、2~3日かけて直接やって来るものとの結論に達した。

2. 季節的移動をする蝶—アサギマダラ—

次に岐阜県と鹿児島県を往復している蝶を紹介したい。季節的に移動する蝶がいることが明らかになったのは、蝶に関心を持っている沖縄の医者がアサギマダラという蝶が沖縄では1年の内夏にだけいなくなってしまうことへの疑問から、どのような行動をしているのか調査しようと呼び掛けたことに始まる。

1981年に種子島で蝶にマーキングをして放したところ、三重県鈴鹿山脈のふもとで、また、福島県白河市で放してから46日目で発見された。秋に鹿児島で放した蝶は27日目に奄美大島で発見された。以後毎年2000匹程の蝶をマーキングして放し調査しているが、その結果、北上するものは全て種子島からのものであること、中部・関東方面のアサギマダラが南に下る時には、伊良湖岬まで来てそこから海を渡っていること。今のところなぜ移動するのか、どこで越冬するのかわかっていない。アメリカ大陸にはオオカバマダラという蝶が秋になると大移動をし、メキシコで親のまま大集団で越冬する例が知られている。太平洋を挟んで、日本と南方との間を同じように大移動する蝶がいることになり、自然の不思議さに感嘆している。アメリカの蝶と



違って、この蝶は多分親としてではなく、卵や幼虫で冬を越していると思われる。今後の調査が必要である。

3. 渡瀬線をめぐって—海を渡らない蝶—

鹿児島県には、動植物の国境線ともいえるべき見えない線が引かれている。渡瀬庄三郎博士がトカラ列島付近を境として、生物相が大きく異なることから提唱されたものである。例えばトカラ列島の悪石島が黒松の南限でハブはいないのに、すぐ南の宝島では琉球松の北限でトカラハブが生息する。

奄美諸島を北限とする種類は150種類あるのに対して、屋久島を南限とする種類は227種類にのぼる。奄美諸島にアマミノ黒ウサギ等古いタイプの動物が生息しているのは、今から1000万年前大陸から渡ってきたものが500万年前地殻変動で大陸から切り放され、取り残された子孫である。

日本列島に生息する蝶は、ほとんどが屋久島

で止まっている。氷河時代を生き抜いた蝶は、日が短くなりはじめると冬越しの準備に入る。時間と気温等、一定の自然条件の中で長い期間生息してきたことから、南に行くことがあっても適応できずに子孫が残せないことによると思われる。しかし、蝶の一部クロコノマチョウ、ムラサキシジミ、ヒメアカダテハの類は、秋に南西諸島で捕獲されているので、北風に乗って渡ってきて親で冬越しをするというような例外もある。

鹿児島県には、氷河時代に生息していた動植物と、その後温暖化して北上してきた動植物が混在している。そうした意味では、南からの影響を強く受けているといえる。

最後に、現代は人間がつくり変える自然の変化が大きすぎるとされる。日本列島に住む人間として、蝶にも安らぎのある住み場所を、分け前の一部を与えてやりたいと思う。

(事務局 安藤和男)

第21回 会員研修会報告

「手づくり展示—写真パネル等のつくり方」

第21回研修会は、下記の要領で実施した。

〈研修日程〉

平成3年11月20日(木) 13時～16時30分まで
研修テーマ：「手づくり展示—写真パネル等のつくり方」

研修日程

・ 13:00～14:00

写真パネル、文字パネル、キャプションのつくり方

担当 國光正宏学芸員(岐阜県博物館)
説田健一学芸員(岐阜県博物館)

・ 14:10～16:30

手づくり展示のしかた

—記念展「鹿児島」—を例に

担当 後藤常明学芸員(岐阜県博物館)

〈研修内容〉

研修会は、参加者が各博物館等で手づくり展示をする時に役立つようにと、キャプションや写真・文字パネルのつくり方について行った。

参加者は11名であったが、実習後、後藤常明学芸員による「鹿児島」展を例に、展示の技法などを含めた解説もあり、充実した研修会であった。

○文字パネルとキャプションのつくり方

ワープロの機能が良くなったので、それを使用してパネルやキャプションを作製する機会が多い。一般的には、印字した紙を両面テープで貼ったり、タック紙に直接印字して貼ったりする。ここでは「ワープロ用粘着フィ



ルム（透明ツヤ消し）」用紙を用いた方法を行った。この方法は、使用する用紙が透明であるので、ミラコーワなどに適当な大きさに切って貼ってもその境が目立たない。また、カラーリボンを用いるとカラフルなパネル等ができる。

- カラーコピーを使用したパネルのつくり方
今回はカラーコピーを使用したパネルのつくり方を行った。

カラーコピーを用いる方法は、安価でしかも短時間で写真や図版を印刷できるので、利用価値が高いと思う。

写真や図版を等倍率からA3の大きさのものまで拡大して印刷ができる。普通に利用している用紙と同じ厚さなので、印刷できたものの裏にスプレーのりを吹き付け、ミラコーワ

などに貼る。印刷したものの中からハサミで必要な部分を切り取り貼ることもでき、工夫をこらしたパネルを作製することができる。

（研修委員長 國光正宏）

★研修委員会からのお願い。

来年度、研修会で実施すると良いと思われる「テーマ」や会員にこんな技法を教えたいと思われる方は、事務局までご連絡下さい。



≡ 県内 ニュース ≡

◎益々充実発展する

東濃地区博物館連絡協議会

さる12月4日(木)御嵩町鬼岩公園内「味由貴荘」において東濃地区博物館等連絡協議会の定例会議が開催され、平成4年度の事業計画等の審議がなされました。東濃地区9館から27名の参加があり、協議会にひきつづき懇親会も開かれました。

この会は岐阜県陶磁資料館の伊左次館長が会長を務められ、東濃地区の博物館等の連携、会員相互の親睦と事業の振興を図ることを目的として年々充実した活動が展開されてきました。

この日も各館から平成4年度の事業計画が報告され、情報交換と同時に事業内容が重ならないよう調整もされました。

この日の定例会は安藤和男岐阜県博物館協会事務局員も参加し、東海三県交流研修会への全面的な協力の御礼がなされました。

懇親会では参加者全員がカラオケで自慢の声を披露され、楽しい抽選会も企画され、会員相互の一層の親睦が図られました。今後各地区でも東濃の実践が輪を広げ、地域ごとの連絡協議

機関や組織ができることを期待したいと思います。

◎新入会館園紹介

野麦峠の館（公立）

大野郡高根村野麦

〒509-34 TEL 057759-2820

代表者 高根村長 中井 勉

設置年月日 平成3年7月1日

編集後記

東海地区博物館連絡協議会と東海三県博物館協会交流研修会が同じ年に開催されるのは15年に一度の割合です。その当番県が今年でした。

事務局も準備段階から大変でしたが、なによりも県外の博物館人が大勢岐阜の地を訪れて下さり、歴史・文化の理解を深めていただいたことです。ご参加・ご協力下さった方々にあらためて御礼を申し上げます。ありがとうございます。